

平成二十六年十一月二十四日（月）晴

文語の苑の主たる活動として會員による文語作品の電網上架あり。幹事の一人として拙文を毎月の更新に合はせ投稿する内、日常の吾が口語文に文語表現の交る傾向に氣付きつ。文語文中に口語表現の混入するは避くべく、文語作文の研修會にても指導あり。その逆たる口語文への文語表現混入の正統性に就き考ふ。

抑も正統性とは先行場裡に於て確立せるものの傳承をいふ。先行文體たる文語體に後發の口語體を混入せしむるを正統とせざるは明らかなり。然らば已に確立せる口語文法と異なる文語表現を口語體に混入するは如何に。

今日行政の國語政策は文語と口語との峻別を要求し、小學唱歌「春の小川はさらさら流る」は「さらさら行くよ」と改訂す。その論據を付度するに、「流る」は「流行下二段の終止形なれば、二段活用なき口語文法に違反すと言ふなるらむ。

一方口語體の歴史を案ずるに、明治の始め「言文一致」を唱ふる論起り、二葉亭四迷「浮雲」を著すも、科白部分のみの「言文一致」に終りけるを、大正期にかけ、鷗外、漱石らの努力に因りて、文語體と整合せる口語體成立す。この經緯を踏まば、口語體に文語表現を含むは何等問題なく、文語形容動詞連體形「堂々たる」を態々連體詞とする必要もなし。

本年の文語の苑シンポジウム文語詩を取上げ、萩原朔太郎と宮澤賢治による文語詩への回歸を主題に講演する機會を頂き、朔太郎の文語詩集「氷島」の詩語に就き、新しき日本語を求め放浪の結果、遂に古き文語に歸著しつるを中心に陳ぶ。

朔太郎は詩人として「心の絶叫」を「言葉の絶叫」とするには口語體は不適なりとす。その一つとして「ネバネバしたる口語體」とて嘗て朔太郎自ら「青猫」に用ゐたる

「虚無」のおぼろげなる景色のかげで艶かしくもねばねばとしなだれて居るのですよ。を擧ぐ。臆測するにこれ口語文法の問題にして、「居るのですよ」は「居る」が終止形にも拘らず同形の連體形として「の」「です」「よ」と粘つくらむ。前述の「流る」、「行くよ」も同じく、まして「∴であると言へるのではなからうか」など「である」と簡明に結び難きは、殆どの活用語が終止連體別形の文語體に比し、形容動詞以外別形のなき口語體の弱點といふべく、延いて日本人の毅然たる言語活動を害ふに至らむ。

朔太郎はこの他にも現代口語の問題を指摘す。文語體への回歸の主張は、昭和初期、日本浪漫派の日本回歸思想の源流となるも、詩人前の大戦中に逝き、敗戦後は國語改革により忘れ去られて久し。現在の口語體未だ完成せず、卻りて劣化せるに非ずや。

此の若く今や口語體の再構築は吃緊の課題にして、その爲には文語體に遡りての工夫求めらる。これ必然的に書き言葉の獨立恢復を意味し、當然の歸結として歴史的假名遣の復活を前提とすべきは言を俟たず。